

Vol. 58
2024 SPRING

TCSSZ
[繋ぐ]

広げる Special Issue:

アートとともに進化する 「阿波和紙」の挑戦

深める 人と自然との共生を学ぶ
和紙漉き体験授業をレポート

特別企画 紙と歩んだ100年を振り返る
「KPP 100years History」

KPPグループホールディングスが発行するTSUNAGU
(繋ぐ)は「紙の魅力再発見」をテーマに、
紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

広げる P01

アートとともに進化する
「阿波和紙」の挑戦

伝える P07

文壇の大御所から送られた
父との関係性が窺われる封書

深める P09

人と自然との共生を学ぶ
和紙漉き体験授業をレポート

深める+ P11

手漉き和紙作家
ロギールさんの課外授業

拓く P12

東京・品川区の環境学習交流施設に
OJO+製の人工芝を導入

特別企画 P13

紙と歩んだ100年を振り返る
「KPP 100years History」

訪ねる P15

新たなコミュニケーションを生み出す
注目の古民家ブックカフェにフォーカス

作る 付録

幸運を呼び寄せる
「てんとう虫の貯金箱」

アートとともに進化する 「阿波和紙」の挑戦

日本が誇る伝統工芸の一つであり、私たちの暮らしに豊かさをもたらす「和紙」。ライフスタイルの洋風化によってその需要は減少したものの、耐久性や美しい風合いは世界的に高く評価され、文化価値が改めて見直されつつあります。徳島県にあるアワガミファクトリーは、特産である「阿波和紙」の伝統を守りつつ、時代のニーズに応える独自の製品を生み出す和紙ブランドの総称です。さまざまな角度から新たな需要を掘り起こし、その魅力を発信することで世界の国々から注目を集めるアワガミファクトリー。その根幹には、郷土に根ざした和紙文化を未来へつなぐための思いがありました。

伝統工芸を守るだけでは、
和紙文化は続かない。

だからこそ和紙の本質は大切にしつつ、
進化させていく姿勢が大切なんです。

Awagami Factory



アワガミファクトリー

住所 : 徳島県吉野川市山川町字川東141
TEL : 0883-42-2772
(阿波手漉和紙商工業協同組合)
0883-42-6120
(阿波和紙伝統産業会館)
公式サイト : <http://www.awagami.or.jp>
ECサイト : <https://www.awagami.jp>

る職能集団であった阿波忌部が麻や楮の栽培をはじめます。そのことが807年に編纂された歴史書「古語拾遺」に記されていることから、奈良時代にはすでに和紙の製造がはじまっていたのではないかと考えられているそうです。

和紙の伝統的な手法である「流し漉き」や「溜め漉き」という技法でつくられる「阿波和紙」は、水にも強い丈夫な紙質はもちろんのこと、素朴な風合いやしなやかな柔らかさが人気となり、全国にその名を知られるようになりました。明治の最盛期には吉野川流域に紙製造業者が500戸を超えるまで発展したものの、第二次世界大戦後になると暮らしの西洋化とともにその需要は徐々に衰退し、数多くの業者が廃業。唯一残った藤森家が母体となる「富士製紙企業組合」を立ち上げ、手漉き和紙の生産を手掛ける「阿波手漉和紙商工業協同組合」、阿波和紙の啓蒙と継承を目的とする「(一財)阿波和紙伝統産業会館」の3法人が一体となって、「アワガミファクトリー」という阿波和紙ブランドを展開しています。

「阿波和紙の伝統を守り続けるために、私たちはお客さまのご要望に合った和紙をつくり続けてきました。『できそうもない』と思えるものでも『できます』と答



①写真の阿波藍の葉は乾燥させたのち水をかけて発酵させることで、染料の元となる「すくも」が完成する。②「すくも」を還元させて藍色に染める液へと仕上げる。③空気に触れることでブルーに変わり、水で洗い流すうちに本来の発色が際立ってくる。④阿波和紙伝統産業会館のショップには、藍染和紙を施した扇子や団扇、ステーションナリなどが販売されている。⑤藍染和紙をアートパネルにした作品。



①②厚みのある和紙づくりに適した「溜め漉き」を行う様子。③脱水用具で水分を吸い取った紙を一枚ずつ干し板に張りつけ乾燥させる。④和紙繊維を水中のかごに入れ、傷、芽、吹きむら、変色した部分を除去する「ちり取り作業」の様子。⑤伝統的な「流し漉き」の手法はそのままに大量生産を可能にする「機械漉き」も行っている。

四国中央部の水源から四国山地を横断するように、徳島を西から東へ流れる吉野川。利根川、筑後川とともに日本の三大暴れ川に数えられるほど豊かな水量を誇るこの川では、おもに関西への供給源として水運業が発展し、流域各地ではさまざまなものづくりの技術が磨かれてきました。

「四国山脈周辺には、かつて楮と三極が生育し、雁皮の生育は阿讃山脈の土壌に適しています。和紙の原料となる植物や吉野川のきれいな水に恵まれたこの土地で和紙づくりが行われてきたことは、ある意味自然な成り行きだったわけですね。そう話すのは、アワガミファクトリーの母体、富士製紙企業組合の代表を務める中島茂之さん。「ここ山川町で地域のシンボルとして親しまれている高越山という山があるんですけど、その別名は木綿麻山といいます。『木綿(ゆう)』は『梶(かじ)』、つまりは楮(こうぞ)を指す言葉であることから、古くから和紙づくりが地域に根差した産業だったことがわかります」。

吉野川中流に位置する吉野川市山川町でつくられる「阿波和紙」。その歴史は古く、今から1300年ほど前にさかのぼります。当時、朝廷に仕えていた忌部氏が阿波の国に入り、それに従属する必要があったのです(中島さん)。

現在、アワガミファクトリーでは、和紙の素材感と意匠を凝らした多種多様な製品を製造・販売しています。そのうちのひとつが、徳島県の伝統産業である藍染を施した「藍染和紙」です。徳島県でつくられる藍は「阿波藍」として全国各地に出荷され、「藍」と言えば阿波といわれるほどに発展。アワガミファクトリーのある吉野川市山川町には藍の生産者が多かったため、かつては阿波藍で染めた阿波和紙もあったそうですが、化学染料の普及により、「藍染和紙」の伝統は長い間途絶えていたそうです。そこで、アワガミファクトリーの先代・藤森実さんと妻のツネさんは、「藍染和紙」を復活させることを決意。藍染めの技法を「から学んだうえで和紙や染色方法の改良を重ね、美しいニュアンスを持つブルーに発色する阿波和紙を完成させました。『どんなに和紙の繊維が長くて強くても、アルカリ性の染

料に和紙を浸していると溶けてバラバラになつてしまう。そこで和紙の両面にこんにやく糊を塗ることで耐水効果を持たせたそうです」と中島さんは話します。阿波藍の生葉を発酵・乾燥させた「すくも」からつくる液体に浸すと、取り出した瞬間の和紙は茶色に見えますが、水で流し空気に触れさせることで酸化し、あつという間に藍色に発色していきます。染めの時間や回数を変えることで生まれるグラデーションや色を重ねることで描かれる模様は、阿波和紙の風合いと合わせることで奥行きのある美しさを纏うのです。



スニーカーの生産過程で発生する端材を和紙に漉き込むなど、アップサイクルの試みにも挑戦している。

内外で活躍するアーティストとのつながりです。海外で開催したワークショップや地道な啓発活動を通じて接点が生まれた画家や造形作家、写真家、版画作家などからオリジナルの和紙をつくってほしいという依頼が増えたため、現在は作品に合った新しい技法の開発を含めてアーティストの作品づくりをサポートしています。「海外では厚みのある和紙が好まれる傾向が強く、また、これまでに長さ5メートルを超える大判和紙の依頼を受けることもありました。そうした用途に応じるなかで、いつしかアートの画材として使う厚くて大きい和紙も、阿波和紙ブランドの特長のひとつとして認知されるようになりました」と中島さん。アワガミファクトリーでは、作品づくりに取り組むアーティストへの技術指導や補助だけでなく、創作のための設備が整った作業場の提供も行っています。漉き場の一部や版画工房、大型インクジェットプリンターを備えたラボを開設し、環境面からも創作活動を支えているのです。「そのほか、手漉き和紙の国際化を図るとともに、アーティストが作品を発表する機会を設ける目的で、2年に一度『アワガミ国際ミニプリント展』を開催しています。これは和紙を使った作品限定で出展できるコンテストですが、昨年開催した第6回展では



①阿波和紙伝統産業会館2階では「小学生によるデザインはがき展」など、地域に貢献する催しも。②③歌川広重が鳴門の渦潮を描いた浮世絵を阿波和紙と藍を使って再現し、公開。④アワガミファクトリーグループ、富士製紙企業組合の代表を務める中島茂之さん。⑤阿波和紙伝統産業会館では、手漉き和紙の製造工程を見学できる。



①活版印刷や版画の機器がそろえられたラボ。②写真のデジタルデータをインクジェット用の和紙に印刷するための機材が充実。和紙へのプリントをオンラインで注文できる。③④アワガミ国際ミニプリント展を開催するギャラリー「いんべアートスペース」と展示の様子。⑤藍染和紙を施した遊び心ある作品も展示。

アワガミファクトリーが和紙産地として存続するためには、新しい需要を掘り起こす必要がありました。新たな販路開拓のために目を向けたのは、海外だったそうです。「もともと和紙は高品質の紙として海外での人気が高く、大正時代から各国に輸出されています。しかし、外国の小売店に和紙が並ぶまでにはいくつもの代理店を経由するため、消費者に産地や生産者が伝わらない。だったら『アワガミファクトリー』というブランドを立ち上げて、自分たちの手で販路を広げていくことにしたんです。そのために力を注いだのが、手漉き和紙の魅力を伝える啓発活動です。海外に行つて和紙の漉き方を教えることもありましたが、今では和紙に興味のある方を迎え入れ、手漉き和紙の全工程を1週間にわたつて学ぶ講習会を毎年開催しています。参加者の7〜8割は外国の方で、和紙を修復に使っている博物館の学芸員やアトスツールで版画を教えている先生にもご参加いただいています。そのような地道な活動の成果から少しずつ海外での流通が増え、今では60カ国のお客さまと取り引きさせていただくまでになりました」（中島さん）。

阿波和紙ブランドを確立するうえで、もう一つ重要な役割を果たしたのが、国

世界中の国々から1052名、作品総数1587点におよぶ応募がありました」と話す中島さんの表情には笑みがこぼれます。

そのほかにもアワガミファクトリーでは、インクジェット印刷に対応した和紙をはじめ、壁紙やアートパネルなどインテリアに用いる和紙、デザイン性の高い生活雑貨など、新しい技術を取り入れることで時代のニーズに応える独自の和紙や製品を製造しています。「伝統工芸は、守るだけでは続かないんです」という中島さんの言葉どおり、これからもアワガミファクトリーは伝統と革新を融合させながら新しい和紙を追求し、さらなる可能性を世界に発信し続けていきます。



「藍色おりがみ」を製造・販売し、その利益を令和6年能登半島地震災害義援金として寄付した。また、平和への願いを込めて、ウクライナ国立歴史公文書館で古文書の修復に必要な阿波和紙8500枚を無償で提供している。

「手紙」は語る

植村鞆音

人間は表現する動物だというのが、手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第三十六回 菊池 寛（前編）

前回、連載回数にちなんで伯父、直木三十五をとりあげたが、直木を扱えば菊池寛のことが書きたくなる。菊池さんは直木にとつて大の恩人であり無二の親友でもあった。直木の菊池との深い縁のきっかけとなったのは、大正九年の暮、大阪・中の島公会堂で開かれた「文藝講演会」である。直木のプロデュースで、講師は菊池寛、芥川龍之介、宇野浩二など。講師には直木自身も名を連ねている。「講演会」以後、直木は文壇の仲間入りを果たし、文壇の二方の領袖的存在だった菊池に大接近していく。

菊池に出会うまでの直木の人生は、どこを切りとつても挫折と借金と繰り返す。それが、菊池との邂逅を転機に彼の人生は反対方向に転がり出す。これは前回書いたとおりである。菊池との出会い、関東大震災、下阪、プラトン社入社、総合雑誌「苦楽」の編集、そして執筆活動の開始へと繋がっていく。菊池との出会いは文壇に人脉と著作発表の足場を作った。菊池が総合雑誌「文藝春秋」を創刊するのは関東大震災の発生する大正十二年だが、直木はここに執筆の場を与えられ、二月号から毎月雑文の類を執筆する。さらに雑文以外にも文壇人を肴にした辛辣極まるゴシップ記事を匿名で書くが、これが人気を呼び、文藝春秋の発行部数を伸ばすのに、役も二役も買う。なかでも有名なのは、当時文壇で活躍していた六十八名の作家を、「学殖」「天分」「度胸」「腕力」「資産」など十一の項目で品定めした採点表「文壇諸家価値調査表」である。

短編小説が映画化された縁で牧野省三を知り、プラトン社を辞めて牧野と「聯合映画芸術家協会」を設立、映画製作を始める。「協会」の文芸部には、菊池も名を連ねている。朝日新聞に連載され人気を呼んだ菊池の「第二の接吻」も直木のプロデュース、伊藤大輔監督で映画化されている。しかし、この映画は、最初からケチがついた。日活と競作となつたうえ、主演に予定していた岡田時彦を日活に引き抜かれ、少ない製作費の関係で、主役の京子を直木の愛人、香西織恵、倭文字を伊藤の妻みはるが演じている。ようやく撮影が終わるに、直木と伊藤が菊池に挨拶に行く。「時代劇映画の詩と真実」に伊藤が書いている。厳寒の冬なのに、直木はコートも着ず、「しんからウソ寒いので立ちだつた」と。「帰りがけると、菊池先生が呼びとめられて、『君、寒そうじゃないか。これ、着て行きたまえ』と自分のマントを持って来て渡された。短

躯の先生の外套が、長身の直木氏に合うはずがないのだが、礼をいって、抱えて出て、さすがに寒さがこたえたか、苦笑しながら肩に羽織つて、ポケットへ手をつっ込んで「ハタと足を停めた。ポケットの底に何枚かの十円札が押し込まれてあつたのだ。傲岸不屈な直木三十五の手がわななき、ほおがひきつった。私は、男が、ほんとうに男泣きするのを見た」。協会で製作した映画、十四本。二年後の昭和二年、直木は、当時の金で二十万円という莫大な借金を背負い、協会を解散して東京に舞い戻る。出版で挫折

るが直木はカモフラージュのため自身も登場させている。「資産」の項目で菊池は二十八万円（いまなら億円か）、直木は「負債」、「風采」の項目では恩人の菊池を三十六点、自身を八十六点としている。別のゴシップ記事「文壇名流見立」で、菊池は、「河馬」となっている。もっともそれだけでは失礼だと思つたのか、「菊池は河馬程愚鈍でない」という但し書きがついてはいる。書いたほうも書かれたほうも一向に気にしない、「二年のうちにそんな間柄になつていたのだろう。」

大正十二年九月に起こった大震災で莫大な借金を帳消しにし、直木は大阪に落ち延びていく。大阪は彼の故郷である。当時出版デザイン界の先端を走つていたプラトン社に紹介状を書いたのは菊池である。たまたま翌十三年から「苦楽」という総合雑誌を創刊することが決まっていた、直木は編集長の役どころでそこに滑りこみ、「仇討ちもの」といわれる小説らしきものを毎月発表して文士の仲間入りを果たす。

菊池と直木。二方が短軀の常識人、二方が瘦身の非常識人。資質も性格も才能もまるで異質。にも拘わらず、菊池は出会つてから死にいたる十三年間、直木を後援し面倒を見続ける。「苦楽」を編集し、作家としてようやく芽の出かかった大正十四年、直木は愛人の名で「苦楽」に発表した「心中きさら、坂」というし、映画で挫折した直木の生きていく道はただひとつ、筆一本に賭けるしかなかった。

直木の代表作は鳥津のお家騒動を描いた「南国太平記」だが、その前哨作ともいべき「由比根元大殺記」は、菊池の口添えで「週刊朝日」に連載されて評判を呼び、直木は作家としての地歩を固める。そして、翌昭和五年から「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に「南国太平記」が連載されて、直木は躍人気作家として花開くのである。

菊池さんと父、清二がいつ、どこで知り合ったのかは判然としないが、わが家には「植村精二様」と上書きされた一通の封書が残されている。（精二は清二の誤り。「今兄どの金銭関係については、今とても『文藝春秋』の原稿料をさしあげるやうな気持はないのですが、何も知らぬ貴君が困りだらうと思ひますゆえ、当座の小遣ひとして金拾円丈さしあげます。いづれ今兄どの話がついたら、また何とかしますからそれまでお待ち下さひ。菊池寛」

文面から察すると、何かの事情があつて、父が菊池さんに金を無心し、これはその回答のようである。父の名誉のためにいつておくが、彼は、菊池さんから親戚の娘さんとの縁談を勧められるほどの親しい関係で、理由のない金の譲渡を頼むような人間ではない。菊池さんは、直木の死後、直木の借金の始末をし、直木が死の直前横浜富岡に建てた家をいったん自分で買い取り、借金の整理をしたうえで、先妻一家をその家に住ませるようなことまでやってくださっているが、直木の死の前後の話は、次回「後編」で。



著者略歴

植村鞆音 エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、(株)テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2005年「直木三十五伝」で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年「歴史の教師植村清二」で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に「夏の岬」「気骨の人 城山三郎」など。



菊池 寛

小説家・戯曲家・実業家
1888-1948

1888年、香川県高松市生まれ。京都大学卒業後、時事新報社の社会部記者として勤める傍ら、短編小説「恩讐の彼方に」などを発表して、新進作家としての地位を確立した。1923年文藝春秋社を創設し『文藝春秋』を創刊。日本文藝家協会を組織し、1936年に初代会長に就任。大映の初代社長も務めた。代表作に小説「忠直卿行状記」「真珠夫人」などがある。1935年、芥川龍之介、直木三十五の業績を記念して、芥川龍之介賞、直木三十五賞を創設。本名は菊池寛(きくちひろし)。

LESSON1 | 下処理



児童たちが復興の森で収穫した楮と三椏を使って、ロギールさんが原料の下処理や加工などを施し、紙漉きを行える状態にしたものを準備。詳細については次ページにてご紹介します。

LESSON2 | 叩解



不要なごみを取り除いた白皮の繊維の塊を打ち台に乗せ、打棒で叩いて繊維質を細かくします。トントントンという独特のリズムを教えてください、ロギールさんが奏でる津野山古式神楽の演奏を聴きながら楽しく作業を進めます。

LESSON3 | 紙漉き



細かくした繊維の広がりや均一にするために、トロアオイという植物の根っこから採れる粘液を混ぜ合わせ、水を張った笥に流し込みます。トロアオイの持つ粘り気、児童たちはとても驚いている様子でした。

LESSON4 | 素材集め



児童たちは教室から校舎の外へ移動。まだ雪が残る復興の森周辺を自由に散策しながら、和紙に漉き込む素材を探していきます。好みの色やかたちの植物や落ち葉など、作品に彩りを添える素材を選びました。

LESSON5 | 仕上げ



拾ってきた木の枝や葉のほか、東松島市の海で採れた海藻や貝を紙料のうえに配置。さらにその上から紙料を流し込み、素材がずれないように固定します。型から外したのち、タオルで包んで水分を抜きます。

LESSON6 | 完成



オリジナルの和紙が完成。授業に参加した17名の作品は一つとして同じものではなく、一人ひとりの個性が現れています。振り返りでは、「みんなと協力してつくったのでとても楽しかった」「もう一枚つくりたかった」などの感想が聞かれました。

取材を終えて

原料の採取から和紙になるまでにはたくさんの工程が必要です。どの工程もていねいに心を込めて進めていく子どもたちの姿は、紙を起点としたビジネスを続ける私たちが掲げるメッセージ「紙でつなぐ、未来をつくる」を体現していると実感しました。復興の森に育つ楮と三椏は、また来年の紙漉き授業の開催に向けて少しずつ成長をはじめます。



完成した和紙作品

復興の森に育つ三椏

▶ 宮城県・宮野森小学校にて紙漉き授業を実施しました

当社は2018年から、宮城県東松島市立宮野森小学校で和紙漉き体験授業を継続的に実施しています。この取り組みは2011年の東日本大震災で被災した同小学校の校舎(旧野蒜小学校・旧宮戸小学校)の建て替えを監修した(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団や、オランダ出身の手漉き和紙作家、ロギール・アウテンボーガルトさんとともに、復興支援の一環として共同開催しているものです。

授業では、校舎に隣接する「復興の森」で児童たちが自ら刈り取った楮と三椏を原料とした和紙に、自然の素材を漉きこんで自分だけのオリジナル作品を制作。漉きこむ素材には「復興の森」で採取した植物や東松島市宮戸島周辺の海から採った海藻や貝殻を使用し、

地域の特色を活かした作品が仕上がりました。

参加した児童は単に和紙ができるまでの工程を学ぶだけでなく、原料となる楮や三椏の実物を見て触り、私たちの生活を支えてきた紙の歴史についても学習。和紙づくりの楽しさだけでなく、自分たちが住む地域環境や自然素材の紙についても深く考える貴重な機会となりました。

当社は今後もこの活動を継続するとともに、(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団の森林保全活動への支援を通して、人間と自然が共存する持続可能な社会の実現を推進していきます。



宮城県東松島市立宮野森小学校
(宮城県東松島市野蒜ヶ丘2-1-1)



東日本大震災で被災した東松島市立野蒜小学校と児童数の減少した宮戸小学校が統合し、2016年4月に開校。校舎には5,000本以上の無垢材が使用され、木組みで形作られた体育館や図書室など、木の香りに包まれた開放的な学び舎は建築物としても高い評価を受ける。校舎建て替えの監修を務めた(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団が隣接する里山の整備を行い、「復興の森」との連携・一体感を重視したフィールド学習プログラムが多数行われている。校歌は、歌手の加藤登紀子さんが作詞・作曲を手掛けている。

(一財)C.W.ニコル・アフンの森財団
<https://afan.or.jp/>



「日本本来の自然を取り戻し、子どもたちの笑顔あふれる豊かな社会をめざすこと」、「100年先の未来のために生物多様性豊かな森を広げること」をミッションとして、2002年に設立。長野県黒姫にあるアフンの森を中心とする森林保全活動を通じて、地域の自然共生型社会づくりを展開する。宮野森小学校では、被災した児童たちの心のケアをはじめ、隣接する「復興の森」の再生、豊かな自然を活かした野外授業を実施している。

※(写真左)2018年2月に実施された和紙漉き体験授業で子どもたちに語り掛ける故C.W.ニコルさん。

持続可能な社会実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介します

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーを循環・再生させることは、現代社会において極めて重要な課題となっています。当社グループは経営理念である「循環型社会の実現」に基づき、事業を通してサステナブルな社会づくりに貢献し、企業価値の向上を図っています。

品川区の環境学習交流施設内のキッズスペースに環境にやさしい紙糸製の人工芝を敷設

1月23日、品川区立環境学習交流施設「エコルとごし」に、当社のグループ会社である王子ファイバーが開発した「かみのいとOJO+（オージョ）」製の人工芝が設置されました。この人工芝は、毛足（パイル）部分に熱帯で栽培される「マニラ麻」を原料とした紙の糸を使用したもので、天然芝に劣らない手触りを実現。従来のプラスチック製より軽量で、紙の特徴として吸放熱性に優れるだけでなく、摩擦熱を通しにくいいため、小さなお子さまが裸足で遊ぶときにも安心して使用できます。

プラスチックによる海洋汚染問題では、日本国内だけでも年間140トンのマイクロプラスチック（5ミリ未満のプラスチック）が流出しており、そのうち最も多くを占めるのが人工芝由来のごみであるとの調査結果*1もあります。OJO+の人工芝は自然由来の素材であり、製造時のプラスチック使用量削減だけでなく、微生物によって分解される生分解性繊維でできているため、ごみになっても環境への負荷を抑えられる製品として期待されています。

「エコルとごし」は環境について楽しみながら学べる施設です。OJO+製人工芝の敷設によって、来館者のみなさまが海洋プラスチックごみの現状を知るきっかけとなり、問題解決の一助になることをめざします。

*1…一般社団法人ヒリカ「マイクロプラスチック等の流出実態調査2020年度版」より。



人工芝を敷設したキッズスペース



外観

コミュニティラウンジ

品川区立環境学習交流施設「エコルとごし」

多彩な体験型展示・イベントを通して楽しみながら環境保全の大切さを学ぶことのできる施設として2022年5月に開館。迫力ある映像展示や、「時間」をテーマにした常設展示のほか、戸越公園の豊かな自然と一体感を感じられる開放的な「コミュニティラウンジ」、小さな子どもが安心して遊べる「キッズスペース」や「遊具広場」などがあり、環境に関する学びの場として、また地域における憩いと交流の場として広い多世代に利用されています。

住所 : 東京都品川区豊町2-1-30(戸越公園内)
 開館時間 : 7:00~21:30
 ※展示エリア・キッズスペースは9:00~18:00
 入館料 : 無料 ※品川区内外を問わず無料で利用可能
 休館日 : 毎月第4月曜日(祝日の場合は開館し、翌平日休) 年末年始(12月29日~1月3日)
 URL : <https://ecoru-togoshi.jp/>

Q 創作活動の近況を教えてください。

A 建築家の隈研吾さんがデザインを手掛け、イタリアのハイブランドが発売したアイテムに、私の和紙作品が採用されています。和紙の原料である楮と桑の樹皮繊維と、コットンをミックスした「和蘭紙」をスニーカーやバッグに施した限定品ですが、新しい発想の創作に携われたことはとても良い経験となりました。



Q 紙漉き体験授業を通して、宮野森小学校の児童たちに伝えたいことは何ですか？



A 原料を栽培し紙を漉く授業を行う目的は、「紙をつくった」という結果よりも、普段使っている紙が「こうやってできるんだ」というプロセスを体験してもらうこと。1本の木からこんなに美しく、1000年もカタチを保つものが生み出せるということを知って、自分なりに新しい感性を創造する力を育んでほしいと思っています。未来を生きる子どもたちだからこそ、自然からたくさんのことを学ぶ感受性を伸ばすきっかけになればうれしいです。

Q KPPグループの創立100周年記念事業ではどのようなかたちで参加されますか？

A 本社地下食堂の隣にあるサンクンガーデンで栽培している楮と三椏の栽培をサポートしました。創立100周年を迎える11月には、その楮と三椏を原料としたランタンを製作する予定です。その監修と社員の方が行う紙漉きワークショップを担当します。ランタンは一般公開される予定なので、たくさんの方に見ていただければと思っています。



手漉き和紙作家

ロギールさんの課外授業



ロギール
アウテンボーガルトさん

1955年、オランダ・ハーグ市生まれ。1980年に来日し、半年をかけて全国にある和紙の産地を見てまわったのち、土佐和紙の産地で12年間手漉き和紙を学ぶ。その後、高知県梶原町に居住し、2006年には紙漉き体験ができる民宿「かみこや」をオープン。自身の手で原料を栽培し、独自の感性と伝統的な手法を組み合わせる。2007年に「土佐の匠」認定、2010年「博報賞」受賞。

Q 紙を漉く前に行う作業について教えてください。

A かみこやでは和紙の原料となる楮や三椏などを、農業や肥料に使わずに自家栽培しています。それを刈り取ったものを甑(こしき)で蒸し、皮を剥いたものを乾燥させて保存。和紙をつくる段階で表皮を剥ぎ取り、白皮したものを石灰で煮ます。その後、天日にさらして漂白したのち、残っている黒皮などのチリや変色した部分を冷たい水のなかで丹念に取り除いておきます。宮野森小学校での体験授業では、木槌で叩いて繊維をほぐす「叩解(だっかい)」の工程や紙を漉く工程を体験してもらいました。

続きの工程についてはP10を御覧ください



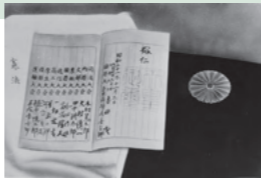
①収穫したばかりの楮。②束ねた楮などの原料を蒸す甑(こしき)。③表皮を剥ぎ取る様子。④冬の冷たい水に手を入れ、不純物の一つ一つ手作業で取り除いていく。

1956
・新潮社「週刊新潮」創刊
※日本初の週刊誌


1957
・三種の神器が人気
(洗濯機・冷蔵庫・白黒テレビ)
・東京タワー竣工


1951
・NHK第1回紅白歌合戦を放送
※ラジオ放送

1952
・マンガ「鉄腕アトム」連載開始


1946
・日刊スポーツ創刊
・マンガ「サザエさん」連載開始
・日本国憲法公布


1949
・湯川秀樹さんがノーベル物理学賞受賞
※日本人初

1936
・二・二六事件
・前畑秀子さんが日本人女性初五輪金メダル獲得


1927
・岩波書店が日本初となる「岩波文庫」を創刊
・リンドバーグが大西洋の単独無着陸飛行に成功(米国)


1929
・ウォール街大暴落(米国)
※世界恐慌のはじまり

社会のニュース／トピックス

紙と歩み続けてきたKPPグループの足跡を辿ってみてください。


紙と歩んだ百年を振り返る

1950s


1940s

1930s

1920s

1954
・資本金を1億円に増額



電話交換室の様子


1931
・日本で初めて米国に紙を輸出
・権太工業と共同で企画し、新聞用紙の輸出に成功


1930年頃の大同洋紙店の広告



当時の業務風景

1925
・海外初の拠点として上海出張所を開設以降、中国国内に続々と出張所を開設


1924
・株式会社 大同洋紙店設立
資本金二百万 本店:大阪
支店:京都・名古屋・東京


KPPの歩み

1957
・国内のクラフトパルプの生産量が重硫酸パルプの生産量を上回る

1954
・この頃から針葉樹不足により、広葉樹の原料利用が増加しはじめる

1950
・製紙記念館(現紙の博物館)が開館

1949
・王子製紙が過度経済力集中排除法により、苫小牧製紙・十條製紙・本州製紙の3社に分割される

1945
・空襲により製紙産業は壊滅的被害。敗戦により権太・朝鮮・満州などの海外工場を喪失

1941
・商工省が「紙配給統制規則」を公布

1933
・王子製紙が富士製紙・権太工業と合併

1926
・米国・林産試験場でケミカルパルプ法を実用化

1925
・富士製紙落合工場(現・サハリン)でクラフトパルプを製造

紙・パルプ業界の動き

PART.1 1924-1960

編集後記

今回の取材で徳島県と高知県にある2つの和紙作りの地へ赴いたあと、帰りの車のなかで「万物は須らく流転する」という言葉をもっと思い出しました。
正式には、ギリシアの哲学者ヘラクレスが唱えた言葉で「万物流転(pantarrheia)」といい、読んで字の如く、変化して留まらない面こそが世界の真相という意味です。

紙の世界にも同じく、和紙一つをとっても時代によって用途や創り方が変容していく姿を、この数日で感じることができました。
二つ目の訪問地アワガミファクトリー(PO3)は、阿波和紙という伝統を継承しながら現代ならではの需要に応え続けるブランドです。デジタルコンテンツにも活かせるインクジェット用紙から、分厚くさらさらとした絵画に表情をもたす用紙まで、和紙から広がる無限の可能性がもうエネルギーと職人技がぶつかり、東京のビル街から来た身として工場はある種のサンクチュアリのようなものでした。

二つ目の訪問地かみこや様(P11)では、代表のロギールさんは「和紙が日本にきたのは宗教を伝えるため、もったかみ砕くと心のため」と仰いました。KPPグループでは11月に迎える創業100周年記念事業の一環として、かみこや様の監修のもとオフィスで栽培した和紙の原料を基にランプシェードを作る予定です。日常に馴染みのある灯で光る蛍光灯は、心のために灯ついているとは思いますが、シェードの凹凸から伝わる暖かなあかりが目に入るとき、現代を生きている私たちの心にも安らぎをもたらすかもしれません。そんな本号から始まる新年度と、100周年へと向かっていく特別な時間をTSUNAGUと共に紡ぎたいと思います。(加藤智香)

KPP Group 100th Anniversary Information

coming soon...

100周年記念サイトの構築を進めています

KPPの100周年を記念した特設サイト公開に向けて、準備を進めています。1924年の設立から今日にいたるまでのKPPの歴史のほか、企業の理念・ビジョンが一目でわかるブランドブックの中身など、さまざまな角度からKPPの魅力に迫るコンテンツをそろえています。100周年記念サイトは近日公開予定です。どうぞ楽しみに。





松庵文庫 (しょうあんぶんこ)

東京都杉並区松庵3-12-22

TEL:03-5941-3662

営業時間:[水曜]12:00~15:00 ※ランチ営業のみ

[木曜・日曜]9:00~18:00

[金曜・土曜]9:00~22:00

定休日:月曜・火曜

<https://shouanbunko.com/>



悠久の時の流れを感じられる、築90年の古民家ブックカフェ

JR中央線「西荻窪」駅南口から10分ほど歩くと現れる、閑静な住宅街に溶け込むように建つ趣のある邸宅。「松庵文庫」は、築90年以上の古民家を改築して2013年に誕生した人気のブックカフェです。店内は奥行きのあるカフェスペースが広がり、現代的な空間とアンティーク家具や美しい調度品が見事に調和し、洗練された雰囲気味わうことができます。「ここはもともと音楽家ご夫婦のお家だったんです」。そう話すのはオーナーの岡崎友美さん。あるとき、ご夫婦がこの建物を手放すことを知り、興味本位で内見に訪れた際、「こんな美しい家を壊すのはもったいない」と、岡崎さん自らこの家を引き継ぐことを決意したそうです。

店内には、新刊本と古書の二種類が置かれ、新刊本は荻窪にある書店「本屋Title(タイトル)」がセレクトした「食」や「暮らし」に関するものが中心。古書は岡崎さんの蔵書のほか、京都の食通や骨董好きが通うことで知られる「喫茶 李青」から引き継いだものだそうです。「古書は、李青さんの2号店が閉店される際に閲覧用としてお預かりしたもので販売はしていませんが、お席でご自由にお読みいただけます」(岡崎さん)。長い年月の記憶や温もりが残る建物と、叡智の詰まった貴重な古書。ゆったりとした時間が流れる松庵文庫は、日々の忙しさのなかで忘れてしまった大切な何かを気付かせてくれる場所です。

無農薬のお米や旬の野菜を取り入れたランチメニューのほか、手づくりスイーツも人気。中庭にある樹齢100年のツツジが美しい花を咲かせる季節、心と身体を癒しに訪れてみてください。



店内には、こだわりの雑貨や食器を取りそろえたショップを併設している。



輸送マイルージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。



針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



KPPグループホールディングス株式会社
KPP GROUP HOLDINGS CO., LTD.

発行:グループ人事部 グループコーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL(03)3542-4166(代)

<https://www.kpp-gr.com/>

TSUNAGU公式Instagram
ID:kpp.tsunagu

ぜひフォローを
お願いいたします!